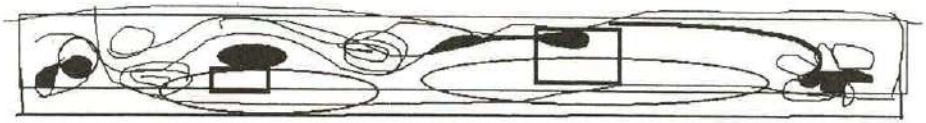
村野次郎創刊

香蘭

2024年(令和6年)12月号

第 101 巻　　第 12 号　　通巻 1128 号

二〇二四年(令和六年)十二月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第一〇一巻第十二号



香　蘭

2024年(令和６年)12月号
第101巻　第12号　通巻1128号

目　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（112）……市川義和…表二
近詠十五首　四季折々に……白井絹子…2
作品
一……4
二……24
三……30
推薦香蘭集……37
香蘭集……38
作品一　十首選（十月号）桜井京子選……14
作品二・三　十首選（十月号）髙畠憲子選……16
村野次郎への旅（176）昭和期の「香蘭」（十一）……千々和久幸…18
一頁公論（43）うたのみなもと……杉山伊都子…22
続・酔風船（12）汝、ひたすら聞き続けるべし……千々和久幸…29
「香蘭集」フレンドチームについて……36
髙田みちゑ「光ある方へ」評（十月号近詠十五首）……阿部容子…42
七首抄（十月号）……鈴木（順）・西・菊地・今井…43
エッセイ・自由研究　戦国武将たちの辞世の句……中村美幸…44
焦点（十月号）　生き物を素材とする歌……伊藤康子…46
作品評（十月号）
作品一……千々和久幸…48
作品二……中村かよ子…50
作品三……川久保百子…52
香蘭集……古澤正道…54
緑地帯……牧野・福本・新井（秀）・八木橋…56
明宝研究会　第一五六回　小島ゆかり歌集『雪麻呂』を読む……満木好美…60
他誌拝見　136……渡辺礼比子…66
歌会及び会合・会員消息・他……67
編集後記・新宿日記……72・表三
表紙絵……山口蓬春「桃」　目次・緑地帯カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（112）

師の住みし紫烟草舎のあと変り
冬日の下に広き河敷

『村野次郎歌集』

市川義和

これは一九六八（昭和四十三）年、先生七十四歳の作品。小題「紫烟草舎のあと」八首の一首目に置かれている。この一連では紫烟草舎跡地を訪問した時の感慨が詠われている。

白秋が住んでいた頃の住所は「東京府下南葛飾郡小岩村三谷（さんや）」（現在、江戸川区北小岩）で、この地に一九一六（大正五）年六月から約一年間住んでいた。いわゆる「雀の生活」時代である。当時村野先生は早稲田大学在学中で何度も通った懐かしい地なのであろう。

新潮日本文学アルバム25「北原白秋」（二〇〇五年四月八刷）77頁に、白秋と同人の写真が掲載されており、白秋の左隣に立つ次郎は白秋の愛犬「哥路（コロ）」を抱いている。大正五年十一月二日撮影とあり、師弟関係の濃密さが窺われる写真である。

この紫烟草舎の建物は現在、千葉県市川市里見公園内に移築されている。

（『村野次郎全歌集』一三九頁、『村野次郎歌集』）

四季折々に

白井　絹子

寒々と吹雪ける北よ　曽野綾子の「一人暮らし」を読みて日暮るる

転ばぬよう言われ始めて気付きたり言わるるまでも無き足萎えに

恵まれて街に住まえど気が付けば右も左も坂のある道

たのしみの未だ残れる吾が脳人生は習うことのあけくれ

覚えては忘れゆくなりあの雲がやがて解けて消えゆくように

その日その日覗く鏡よ〈鏡の神〉が宿ると知りて優しく磨く

巻尺に戯れる家猫　かけがえの無き友としてあたしと生きる

コンポストの中に埋めたるフルーツの皮がゆっくり土に還りぬ

手入れする度に甦る庭の土サラダ菜蒔こう小松菜蒔こう

幻となりたるさつき眼裏に咲かせておれば亡夫の過りぬ

道の辺に踏まれもせずに咲くスミレ人の心に灯りて匂う

近詠十五首

眼裏に昭和が遠くよみがえる　ゆっくり歩こう令和を生きて

遠くにぽっと明かりが見えて友垣の貌がしだいに点景となる

〈盗人の種は尽きまじ〉五右衛門の遺しし言葉今も世にある

ブルーベリー手の窪ほどが採れました佇みて食む一番の味

ひと言随想

わたしの原点

太平洋戦争が終りに近い頃、私は小学生であった。物の無い時代、探検好きの私は裏の物置で一冊の古い本に出会った。

・わけなしと登ってみればみな悩む富士は三国一の山なり

・上は北　下は南で　右東　左は西と心得よとて

この言葉は今も私の脳裡に潜んでいて、新しい地図を広げた時など思い出すのである。

七五調のリズムの楽しさ、富士山の標高や地図の見方も面白い。はじめて文章というものに魅力を感じたのだろう。

中学生になると日記の隙間に短歌らしいものを詠んでいる。自然に芽生えた短歌作りの原点は、当時にあったように思う。啄木に憧れたのもその頃だった。時を経た今も四季折々の花を愛でながら、歌のフレーズを追いかけている。

四選者の作品

未必の故意　　平塚　千々和　久幸

「いざ生きめやも」かあ　生きたとて死んだとて何が変わろう風よ
わたくしの時間を返してくださいと風に言わせて金鳳花咲く
訳有りの女人は先に帰したり飲み足らざるが残りて囃す
旧かなの歌人は向こうのテーブルに追いやり新酒を飲む者が寄る
実存の不安の闇の不条理の谷間に生きて恙なかりき
不毛なる議論もときに暇潰しくらいにはなるか　酒が足りぬぞ
亀ちゃんが後から来るからそれまでは飲まずに居てと連絡のくる
ああ母ちゃん仏壇の花が枯れちゃって　未必の故意には非ざるよ

駅の階段　　東京　桜井　京子

世の中のぜんぶが敵でもいいやうな炎暑のなかの珊瑚樹の色
最強の台風十号ゆつくりと近づいてをり　誰かが死ぬね
「ゆつくり行く者は遠くまで行く」か、私はあるく駅の階段
なぜこんなに眠くなるかともう一人のわれが呟く晩夏の午後を
ぬねむりし椅子から転げさうになるこんな私になつてしまつて
本当の空を知らないアメンボウちひさな水辺の空を揺らしぬ
積乱雲とほくに見えてそのうちに忘れてしまふ大事なことも
もう夏は終はりなれども朝顔のつるを降りてはまたのぼる蟻

炭坑節　　横浜　渡辺　礼比子

あなたには構っておられぬというごとくパソコンは新手の技を繰り出す
若者は火鉢を知らずわたくしはエモいを知らず　楽しや歌会
「しのぶれど色に出でにけり」は芭蕉作　AIがまたでまかせを言う
土曜日が空いてるなんて恥ずかしく君の誘いを拒みしハタチ
はじめてのデイトに遅刻したわたしそれより四十九年をともにす
藤沢から哲学堂まで自転車を漕いできた君二十五歳の春
隣人の孤独死恐れいたりしが何の役にも立たず逝かしむ
盆踊りの炭坑節がきれぎれに聞こえてきたり旅の窓辺に

通り雨　　鎌倉　高畠　憲子

フィナーレに苦笑ひする佐田啓二を大きく映し「完」となりたり
佐田啓二の「集金旅行」を観終はりて館出でたれば昼の町なり
古きシネマ出づれば蔦の葉のまぶし通り雨すでに上がりてゐたり
お互ひに忘れ物しあつてゐる日なりひとまづ今日は引き分けとする
「貼るカイロ」「貼らないカイロ」店頭に並ぶ隣の「貼れないカイロ」
都合よきことだけ覚えてゐるわれを誰かがきつと憎みてをらむ
「清濁」のおほき墨書の掛かりをり鎌倉公民館の奥には
泥酔の立原正秋の居たバーの跡形もなし小町路地裏

作品一　十首選

（十月号作品から）

桜井京子選

・知らざれば聞かずにおかんそののちの薔薇の噂もさまざまなれば

千々和久幸

一読して、暗喩にくるまれた奥深い人間の世界を垣間見るような歌である。薔薇は、かつて心を寄せた、あるいは濃密な関係にあった相手であろう。風に乗ってもれ伝わってくる噂は、毀誉褒貶相なかばして、真偽のほどは定かではない。薔薇に例えられた相手の、華やいだ姿や経歴が思われる。心に掛けながらも、もはや手の届かないところにいる存在であってみれば、ここは黙って通り過ぎよう。せめて今が幸せであってほしいと願うばかりだ。

・杖をつき始めた友のぎこちなき歩みも乗せてバスは発車す

飯島智恵子

年齢を重ねると身体のあちこちに不具合が生じるが、友もまた近ごろは杖をつくようになったかと、感慨深く見ている作者である。歩き方がぎこちないのは、不慣れな杖のせいばかりではなく、体力が衰えているのかも知れない。長年の付き合いを重ねて、今日までともに支え合って来た二人であろう。友を乗せてバスは発車して行ったが、杖を持つ友の残像が脳裏にきざまれ、明日は我が身、との思いがふと過ぎったのではあるまいか。

・熱き湯にゆつくり咲く茉莉花茶　彼女にはきつといい人がゐる

石井　雅子

熱湯を注いで茶葉のひらくのを楽しみながら、不意にひらめいた想像を歌ったものか。あたりには茉莉花茶の強い香りがただよい、彼女には恋人がいるに違いないと、ひらめきは確信に変わったことだろう。他人の恋を思い浮かべてそれを愉しむような、大人のゆとりの感じられる歌である。秘められた恋の行方を想像し、茉莉花茶の華やかな香りとともに、ますます想像は膨らんでゆく。

・谷あひの町の夜空の闇は美し一筋二筋花火の揚がる

岩田　明美

作者の暮らす島根県東部の谷あいの町の花火である。都会のような何万発もの花火が次々にあげられるのとは異なり、一筋、二筋とあげられてゆく様に静かな趣がある。いわんや作者は、花火のあがる夜空の闇をこそ美しいと述べる。谷あいの町の夜空を一瞬照らしては消えてゆく花火。その花火の向こうの深い闇に目を凝らしたところに感覚の冴えがあり、さりげない詠み口だが印象深い。

・母が逝きわたしが残るあくる日もあくる日も降る過去からの雨

江口　絹代

「母逝く」とタイトルのある一連の一首。母とともに過ごした歳月が思われる。「遠きより思えば恋しき母なれど近くにありて戦える日々」という歌もあり、母と娘の縁の強さと複雑な心模様がうかがえる。母が逝った後、残された作者に去来するのは、もはや母のいない世界の虚無感か、あるいは何かしらの後悔の念であろうか。折しも季節は梅雨。母との日々を追想させる雨は降りやまず、さらな

る嘆きを誘うのである。三句以下の畳みかけが巧みな歌である。

・帰り際九十歳のわれなれどまた会おうよと言って別れる　柏原　義清

弟の親族が大勢で訪ねてきたという一連の中の一首。楽しい語らいの時はたちまち過ぎて、その別れ際、交々に挨拶を交わし合いながら、次の再会について口にする作者である。自身の年齢を思い、再び元気で会うことが出来るかどうか、確信は持てないが、とりあえずこの場合はそう言う他はなかったのだ。自身に残された時間がどれほどか、そう考えると辛くなるが、周囲に気を配り今を精一杯明るく生きている作者を応援したくなる歌である。

・内科、歯科、耳鼻科、眼科と行き慣れて全て私の安全地帯　城　富貴美

身体に不具合があれば診てもらうのは当然のことだが、随分あちこちの医療機関にお世話になっていることだ。昨日は内科、今日は歯科などと言っては通い、それが日課となっているのだ。こうして医療機関に通院できるのは、笑い話のようだが元気な証（あかし）である。体のケアを行う場所を「安全地帯」と呼ぶのは、やや曖昧さは残したが、大きな障りなく晩年を過ごしている作者。限りある時間を生きる中で、ひと時の安らぎを求めながら、だが、本当の意味での「安全地帯」などどこにもないことを知っている作者でもあろう。

・夏さればただただ夏を蟬のごと鳴き暮らしたい　大樹のかげに　鈴木　桂子

「夏されば」は「夏去れば」、「夏になると」の意味である。今年も長く厳しい猛暑の季節がやって来た。作者はこの夏を何もせず、何も思わず、蟬のようにひたすら鳴いて暮らしたいと歌う。そうはいっても蟬には蟬なりの事情があり、懸命に短い命を鳴き尽くそうとしているのだが、身を寄せるべき大樹が蟬にはある。作者にはそれがないと言いたいのだ。この歌からは深いため息と、言い知れぬ寄る辺なさがうかがえる。この作者には、身の裡に淀んだ深い疲れがあるのかも知れないと思わせる歌である。

・何人か溶けていっても気づかない室外機だけ鳴っている町　中村かよ子

今年の夏は全国的にすさまじい暑さとなり、作者の暮らす福岡も記録的な猛暑日が続いた。危険な暑さとも、溶けるような暑さとも言われ、出歩く人も少なかったはずだが、それでも人の活動は止められない。猛暑の中、出歩いていた何人かは溶けてしまったのではないか、との想像は納得がいく。多くの人はエアコンの効いた屋内に閉じこもっていたのだが、真夏の昼下がりに人影が消え、室外機だけが鳴っているという情景は不気味だ。

・炎天下メダカの稚魚は餌を欲る頑張ることを止めたる吾に　山中　光枝

猛暑が続いて人が弱り果てる中、水中のメダカたちは極めて元気である。餌を与えれば与えるだけ、貪欲に食べてしまうメダカたち。暑さで食欲も細りがちな作者とは対照的である。活発に動き回るメダカの稚魚に、自身からはもう失われた若さや活力を見ている作者である。これまで十分に頑張って生きて来たのだから、これ以上無理をすることもないと思いつつ、それでもメダカたちの元気さを羨む気持ちもある。猛暑が収まればまた新たな気力が湧いてこよう。

作品二、三　十首選

（十月号作品から）

高畠憲子　選

・五才の時母には頼らぬそう決めた三人きょうだい長女の我は

小笹岐美子

きっぱりとした物言いにハッとする。まるで自叙伝の一節を読むのような凝縮度と緊迫感がある。なぜ実母に頼らぬのか、内包されるドラマについては、読者が想像するのみだが、ぐっと引き込んでくる力を秘める。短歌一首は、一編の小説にも匹敵するという。以前巻頭十五首「デラシネの子」連作を披露したこの作者。歌による物語の続きを読みたくなってくる。

・吾の眼に親しき妻の歩き癖遠ざかれるを追いかけてゆく

小原　裕光

妻と連れ立って浜辺を歩く歌の一連中の一首。背景がわからなくても、上句から、普段からよく一緒に歩く二人であることがわかる。この歌の秀逸は、妻の姿そのものでなく、見慣れた妻の歩き癖が遠ざかる、と表現したところ。感覚が鋭く人物をよく視る作者である。

・奥武島の天日干しイカがハタハタと白旗のごと風にゆられる

加瀬喜美江

こちらも旅の歌。奥武島とは、沖縄の島の名である。きっと当地名産のイカの干物作りであろう。よく情景のわかる比喩を用い、ハタハタというオノマトペとの音の響き合いも楽しい。旅行詠はともすると絵葉書的で、ああそうですか、となりがち。ところがこの作品。凝り過ぎず、見たまま感じたままの素直な描写ですっきりとしており、読者も胸がすく。沖縄の潮風が香るようで、海原の色、晴れた海辺に干されるイカの白さが美しい。読者の心も旅をする。

・降り立ちし妻籠の宿は墨絵色雨にけぶりて江戸を引き寄す

中井　房江

こちらは、長野県の妻籠。一気に雨の木曽山中へと読者の心も飛ぶ。妻籠の街道の景は、旅の情報誌やメディア、あるいは藤村の小説でもよく知られ、古い木造建築が並ぶ。雨ともなれば、まさに江戸時代に潜り込んだように感じられたのであろう。初句の入り方が何気ないが、旅の状況を語る上手さがある。結句、タイムスリップ、などの平凡な表現でなく、、江戸を引き寄す、に作者の独自性が出た。

・一年ぶりにがつてん寿司に来てみれば女性職人並びて握る

山下　紘正

まず、作者の身体の事情を抜きに読んでみる。寿司職人の世界といえば男性社会であったものが、最近は女性も進出しているという現代をよく映している。同作者の一連には〈浦霞にまぐろ三昧を前にして生きてゐることしみじみ思ふ〉とあるように、大病を克服しやっと外食がかなった喜びが出ている。その延長で読むと、しばらく外の世界に出られなかった状況からやっと、普段の生活に復帰。そこで見た光景がとても新鮮にも見えたであろうと想像された。〈がつてん〉＝合点、に通じ、そのユーモアも愉しく読んだ。

・高校の担任の名前忘れても「さざえさん」のあだな忘れず

生田　絹代

面白いところを捉え、一首にしている。人気漫画で知られる「さざえさん」。（昔はサザエさんだったか）独特の髪型を含め、丸顔で元気な人物のイメージがすぐに湧く。読者の中には、共通体験がすぐに思い出されるのではないだろうか。かく言う筆者も中学の時の「タコ先生」を想った。本名はなんといったか、忘却の彼方である。漱石の『坊ちゃん』にも「赤シャツ」「野だいこ」「うらなり」…面白いあだ名が満載だった。広がりを生んで読者も愉しい一首。

・小刀で亡父が削った鉛筆がそのままにあり四年目となる

小野香代子

鉛筆は小刀で削った時代が確かにあった。戦後生まれの筆者ではあるが、昭和一桁世代の父は小刀派。手回しの鉛筆削りが出回ってはいて、家や学校にはあったのに、父は〈肥後守〉を出しては、よく削ってくれたものだ。この方の父上も同じであったらしい。亡くなって四年、ということも結句より察せられ、しみじみとする。形見となった鉛筆には削り跡も残っていて、作者の父を偲ぶ気持ちがよく出ている。事物だけを淡々と語っていて思いが豊かにこもる。

・捨てられし雑貨ら百鬼夜行して何か言いたげに散らばる朝

篠永　路子

百鬼夜行とは、また、面白い言葉を詠みこみ惹きつけられた。本来は、たくさんの妖怪が夜を練り歩くという想像上のお話。平安時代より、説話や絵画に残されてきたようだ。中には、捨てられた鍋や釜といった日常の雑貨類が妖怪と化し、夜な夜な出歩くという絵もある。作者は、現実のゴミ集積場を見て詠まれたのではないか。今日は、燃えない危険物の日でもあったか。前日の夜から出す輩がいると、たまたま鴉でも悪さをして、集積場に鍋釜類が散乱したのかもしれない。その様を「百鬼夜行」の跡、と見立てたところがとても面白い発想。このような想像力の飛翔は、創作側も受け止める側も楽しいもの。

・この道で良かったのかとブランコに子と揺れて聞く初蟬の声

中島由美子

子と一緒、あるいは、お孫さんと一緒に揺れているのであろうか。ブランコは、子どもの頃の無心に漕ぐ時代と、物を想うシニアの時代とがありそうだ。公園に行けば必ずある遊具ながら、時に人生の季節を感じさせる。ブランコの揺れがそうさせるのだろう。作者の膝には幼子。耳には初蟬の声が聞こえている。この道＝選択、で良かったのか、と揺れつつ呟く内省の言葉。とても心惹かれる。けして歌が暗くないのは、膝の幼子の身体の感触と今年初めて聞く蟬声のせいかもしれない。

・炎天下の赤信号で立ち止まる未だ砂漠には行ったことがない

藤田　祐恵

この夏の酷暑が思われた。まさに炎天。そのもとで、アスファルトの照り返しを受けての信号待ちはこたえたであろう。この結句、作者の頭に、はからずも過った砂漠のイメージであろうか。それとも、地球全体のこの止まない異常気象を思い、いつか砂漠化してしまう未来を想ったか。そこには人間はおろか、生物はもういないのかもしれない。

村野次郎への旅（176）

昭和期の「香蘭」（十一）

千々和　久幸

前号に引き続き「香蘭」第五巻第六号（昭和二（1927）年六月一日発行）で書き残した前月歌壇合評（杉浦翠子、冬野木枯、深野庫之介、橋本敏夫）を読んでいこう。

○

草の實　　水町　京子

坂の上の大き榎の五百つ枝にふりしきる雪
みつつのぼるも

大榎の高枝どもよす吹雪の音はげしきを
きゝて立ちどまりたり

（庫之介）あの緊張し切つた感興を、上句の冗漫さと五句のみつつの弛緩がすつかり裏切つてゐます。そして歌の方でも少し口を開いてしまひました。

（二）自らが立ちどまらざるを得なかつた程の様子が表はれてゐない。徒らなる誇張は吾々に何等の力をも及ぼさない事をよく教へて呉れる。

（敏夫）第一首水町京子さんは一体何處へ登るのだか判らない。「五百つ枝にふりしきる雪を見つつ」「大き榎」に登るのでは有るまいから坂に登るのであらうが、第一句「坂の上」とあるのは大き榎の所在を説明してゐるに過ぎなく、結句「のぼるも」の目的格とはならないのである。歌は描出すべき藝術である故表現が適確でない限り、内容の有無は問題でない。で之歌意味が通る丈で全く未だしである。

第二首、初句から四句迄の雄壮な大榎を支持するには結句が余りに脆弱である。其上三句を名詞で止めたのは四句への連絡をぎこちないものにした。助辭の「を」もいけない。調子を弱める事に役立つた丈けである。四句の助辭「て」はうまい。他所の缺陥を余り目立たないものにしてゐる外に弱い結句を支へて多少なりとも力を與てゐる所流石である。

○

日光　　金子　薫園

たをやかの白樺の木よ春の日はこの山と木
にとふりそそぐかな

夕づく日ユーカリの樹の白肌にのこりて園
は露だちにけり

（庫之介）降参しました、私は何も云へません、然しこうしたものが歌であるとするならば、私は、決して現在の如く苦しんではゐないでせう。先生程の方が、かゝる歌を發表されるといふ事は私達若い苦しめるものにとつて、果して慰めでありませうか。それとも誘惑でありませうか。私は然し、先生のお歌を前にして決して自分の苦しみを解決することは出來ませぬ。苦しさは愈々深くなるばかりです。

（敏夫）私は今の歌壇に未だに之種の歌の存在する事を悲しむと同時に金子氏程の大家がと思ふと寂しい。然し金子氏は所謂老大家と云ふ丈けで、又雑誌「光」が歌壇圏外のものであるとするなら問題は別だ。ともあれかう云ふ歌を作る事は少しも金子氏の名誉とはならない。第一首、白樺を「たをやか」に見る所既に感覺が違ふ。「春の日は」「この山と木と」「ふりそそぐかな」余りに呑氣で余りに鈍

感である。助辭の使用法も緊張を欠いてゐる。初句の「の」二句の「の」「よ」三句の「は」、四句の「と」「にと」結句の「かな」も丁度雜木をたち切つた様にばらばらである。第二首、前のよりは遙かに感も調子も出てゐていゝ。然し、署名を消してしまつたら初學な投書家程度を出まいと思ふ。

×

水甕　　安永信一郎

町裏の川洲にながき板橋を日のくれさむく渡りけるかも

踏みわたる板橋の板しろじろと夕べの風にふきかわきたる

（庫之介）（一）苦心したらしい、けれどもその苦心が失敗してゐるのではあるまいか。折角の、川洲にながきが説明以上でなく日のくれさむくも安易過ぎた。更に、二句と四句、同じ様に四三の調子で行ったのも氣になる。（二）板橋の板は何とかならなかつたらうか、夕べの風もこの場合陳腐ではないか、こゝに擧げた二首とも一寸感興は惹かれるのだが、人込みにもまれながら遠い舞臺の芝居を見る様なもの。妙なぎこちなさと、ぢれつたさとがあり、そして未練ののこるもの。

（敏夫）北原氏に「みちのくの千賀の鹽釜雨に來て木の橋わたる大き木の橋」と云ふ歌があるのを私は直ぐに思ひ出した。第一首の一二句表現が足らなくはないが。もう少し緊まるやうだ。三句「板橋を」と固く斷つてゐるが態々斷つた程の効果が見えてゐない。尤も「を」と限定して「日のくれ云々」に續く處一寸感を斷つてゐる爲であるかも知れないが、この點北原氏の「木の橋」の用ひざまが參考にならう。結句の「けるかも」もどうもしつくりしないやうだ。之れは四句との連結が緊密にいつてゐないせいである。之「日のくれさむく」なる四句、三句にも惡く結句とも離れ勝ちになつてゐる。いゝ言葉であるが六ヶ敷い處である。第二首は全然いけないと思ふ。「踏みわたる」如何にも花道を行くやうで力が這入つてゐるのに「板橋の板くろぐろと」で勢力を他所へ向けてひょろひょろしてしまつてゐる。結句「ふきかわきたる」は面白い處の様であるが、「吹く」のは風で「かわく」のは板橋の板である。かう考へると少しおかしくなりはしまいか。本當は「板橋の板」は「風にふかれてかわいた」のであるから。尤もこの歌固くなつてこんな事を論ずる程の作ではない。

村野先生の編輯後記を付記しておこう。

○いろいろ仕事の暇を見て地方に遊びにゆくことにした、前には信濃へ、今度は印旛沼の吉植氏の處へである。印旛沼へは森田恒友畫伯が一所においで下さつて幸であつた、畫伯と吉植氏と本間君と私の四人であの古のままのやうな葦沼を小舟で漕ぎまはつてゐると、都で齷齪動いてゐる私の頭の具合も一日で大分變つて來るようである。後から宇都野研氏が見えたので、所謂ご自慢のトラクターや用水の發動機を見た。兎に角エライ事をやつてゐて愉快である。この事は本間君が詳しく書くことと思ふ。

○諸君も承知と思ふがアルスの日本児童文庫は素晴らしい勢である。これが爲め北原先生は多忙にて一寸御面會出來ないかも知れない。

○今月は筏井君が力作を寄せてくれた。稀の発表でありながら深い心の響きを持つてゐる。逐月の出詠を見たら皆の勉強にもなると思ふ。

酒井君は歸郷中である。今月あたり上京する筈であるから落着いたら作歌に專念するであらう。

一頁公論（43）

うたのみなもと

杉山伊都子

短歌に惹かれてまねごとながら作り始めて何年になるだろう。最近この想いを述べるのにぴったりの美しい形、五七五七七のみなもとを知りたくなった。図書館で相談すると本を探し出してくれた。〈地図とあらすじでわかる古事記と日本書記〉〈古事記と日本書記〉〈短歌学入門〉〈和歌のタイムカプセル〉の四冊である。

長い歴史をもつ和歌が現在の短歌と呼ばれるようになったのは明治三十年代と聞いている。しかしそれ以前に長歌のあとに詠み添える反歌を短歌と呼んでいた時もあった。

これまで短歌の初めは〈八雲立つ…〉のうただと聞いていうた。古事記の表記によれば〈夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻碁微爾夜幣賀岐都久留曽能夜幣賀岐袁〉だと聞いていた。しかしこんな整った形が最初というのはおかしい、ここに至る前に何があったのだろうと思った。古今倭歌集の仮名序の初の方に〈このうたあめつちひらけはじめるときよりいできにけらし〉とある。即貫之達の起源説によると神話の時代に起源があったと言っている。古事記（西暦七一二年に出来たもので全三巻、天地開闢の頃より推古天皇の時代までの天皇家の歴史を書いたもの）、日本書記（西暦七二〇年に全三十巻で成ったもの。天地開闢の頃から持統天皇までを収録し内容は律令国家の正史を書いている）。この二冊の天地開闢の頃というのは神話の時代である。この頃には歌垣（男女が山や野に集まって互いに歌をかわし舞踏して遊んだ行事）、一種の求婚方式という習俗が形成されていたようであり、神話として想像するしかないけれど、歌垣の時にイザナギとイザナミが出会い掛け合った〈歌掛け〉の「あなにやしゑをとこを」「あなにやしゑをとめを」が短歌の初めではないかと言われている。その後スサノオという神が出雲に来てヤマタノオロチという大蛇を退治し、クシナダ姫と結婚する。その時にうたわれたのが〈八雲立つ…〉の歌であり、神話では御自身の歌とも、村人が祝婚として掛け合った歌とも言われている。現在記紀にのる歌は〝和歌以前〟として〈歌謡〉と呼ばれている。

この歌垣での歌体を見ると短歌体未定形に対し片歌体で応える、例〈倭の高佐士野を七行く誰をし枕かむ…大久米の命〉〈かつがつもいや先立てる兄をし枕を枕かむ…神武天皇〉。また短歌体＋片歌体に応えたのが施頭歌体であったりと様々である。歌垣を広く流行していて共通した基本の形としては五七五七七が多い。この短歌体は歌垣の掛け合いの一つの形として存在し、七世紀前半頃にもっとも適合した形式とされたのではないかと思われている。

歌は神に捧げ、死者を弔い神話を伝承し民族の出来事を伝え人間の感情を支えたりと様々だったであろうと推測されている。

つまり短歌体は歌垣の歌の中で育まれた形式であり、そして歌の基本が男女の恋歌の掛け合いにあり、それが萬葉集の相聞歌という恋歌の形式につながっていったと考えられている。文字の伝来により口誦から記述文学へと移行したのである。

簡単にまとめて書いてしまったけれど、長い長い短歌の道―これからも変化しつつ続いていくであろう道―とても楽しみである。

続・酔風船（12）

千々和　久幸

汝、ひたすら聞き続けるべし

もう昔の話で詳細は忘れてしまったが、さる新聞記者が日本一のセールスマンに「セールスの極意」を聞こうとインタビューしたことがある。面会相手に選ばれたのは、当時契約高が業界一と言われた某保険会社の女性外交員だった。そしてそのインタビュー記事にはこうあった。話を聞き出すために記者が予め用意した質問がまったく役に立たなかったばかりではなく、記事にするような極意もノウハウも遂に聞き出せなかったというのだ。現実はインタビューしたつもりの記者の方が、実は終始一人で喋っていたのである。

わたしはこの記事を読んで、かつて自分が恩師に相談に行った時のことを思い出していた。当時まだ二十代の半ばだったわたしは、高校の恩師に結婚の相談に行った。相手の女性は交際していた男性に捨てられ、男性不信に陥っていたのだった。なぜそんな女性を好きになってしまったのか、今もって分からない。

ただ恩師に相談に行く前に実はわたしは何人かの友人にも相談していたのだ。友人はみな「前科のある（？）女性はよせ」だった。そのことは恩師には内緒だったのだが、恩師のアドバイスはこれがまた痛烈だった。「あんたねえ、もう自分で結論を持っとろうが。その上でわたしに同意を求めに来たんじゃろう！」であった。

さてこんな恥っ曝しの昔話を書いたのは、相談を持ち込まれたら「ひたすら聞き続けるべし」と言いたかったからに他ならぬ。わたしたちは何か相談を受けると相手の悩みを聞く前に、待ってましたと許りつい自分の意見や考えを押しつけてしまいがちである。先の新聞記者ではないが、聞くつもりが先回りして自分の意見を相手に押しつけてしまうという早トチリをやった。多くの場合、相談相手はなにがしかの解決方法や答を用意しているのだ。だからそれを黙って聞いてやれば答は相手が自ずから考え出すのだ。

こんなことを今さらくどくど書いたのは、永田和宏『知の体力』を読んだからである。そこでは同じ京大教授であった臨床心理学者の河合隼雄のこんなエピソードが紹介されている。それは「河合隼雄の極意」と小見出しのある一節で、こうある。

…カウンセリングの極意として河合さんが紹介された方法は、眠るように相手の言い分を聞き続けるということだった。一対一で向かい合い、相手の言葉に耳を傾ける。自分からはいっさい言葉を発しない。目をつぶって聞き続ける。話す相手が、「このおっさん、ほんまに聞いてくれてるのかいな」と心配しはじめたころを見計らって、「うーん」と同意でも反対でもない相槌を打つのだそうだ。そんなふうに相手がもう話せないと思うところまで聞き続ける。

永田はこの後を引き取り、相談事というのは、たいていは『聞いてもらうだけでいい』のである。相談するときには、相談する方にもだいたいの答えは出ている場合のほうが多いような気がする、と書いている。

はてさてこれ以上わたしが何を付け加える必要があろうか。